



籍 2009)

7つの原則はデザインする原則とした、大きな社会のムーブメントになった。

高貴な人の家ではなく、狭い家、小さな家であってもこの7原則で考えることで豊かに暮らすために交流を促進するゾーニングを提供することにつながる。

グロピウスが大切にしたことは、使い道、使いやすさ、美しさ、大衆の誰でも住める家。

例えばインテリアを考える時、高級なモノでなく、品質のいいものであることを求めた。スタイルではなく、内容、使い方、使いやすさ、価値、モノに潜んでいる理由を追求しなさいと教えていた。人間の歴史を全て見直し、人間が造ったものの中からプロトタイプを見出すこと。このことは優れた目がないとできない。

そういう発想をバウハウスで追及した。

バウハウスはデザイン学校だが、認識学校とも言われた。ホリティックに考え色々なことを研究し追求していた。こういう基礎の勉強をして、いろいろなことが分かって、その後全部門で共通認識が生まれる。

その結果優れたデザインが生まれる。現代に通じるホリスティックな理論性である。

新たな提案にあふれている

ハウス・アム・ホルンでは家族はセンターリビングを通して自分の部屋に行く。

子どもはキッチンとダイニングをとお母さんと会話してから自分の部屋に入る。子ども部屋には庭に出入りできるドアがあり、いつでも外で遊べる配慮がある。更に子供にふさわしい家具デザイン、カラーリング、天井から照明も床に写す影絵が考えられている。

夫婦の寝室はバスルームを挟んで独立して配置されている。ご主人の部屋の隣に書斎があり窓から自然の木々が見える。その窓は「瞑想の窓」と呼ばれている。

センターリビングの 4.5mの天井上部に太陽光を一日中取り込む窓が太陽の動きに合わせて2面ついている。

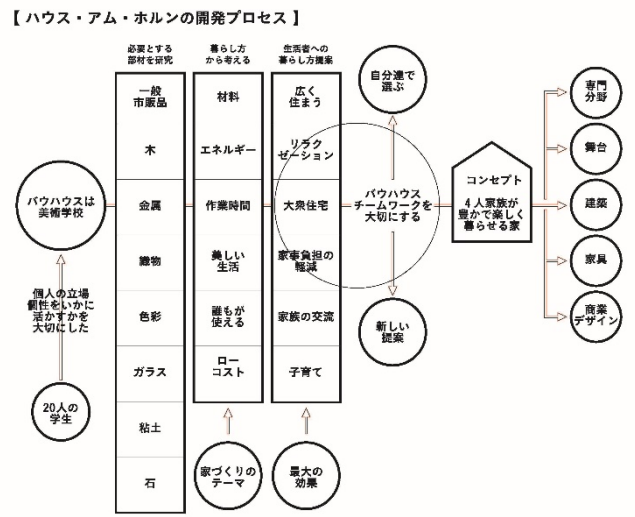
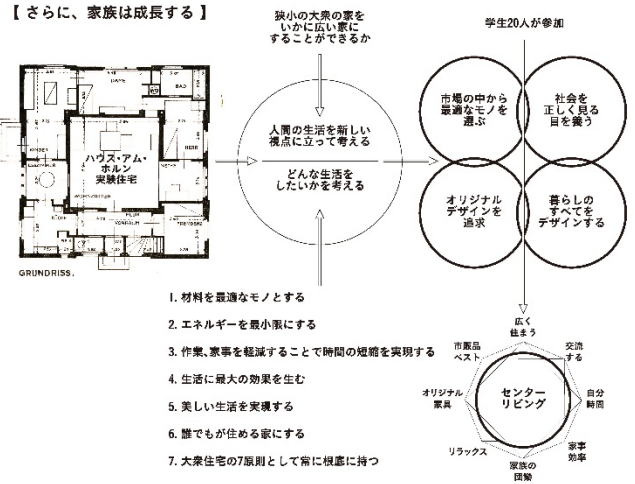
外装・内装はホワイトに近いグレーだが、塗料に貝殻の粉末が混ぜてあり太陽光が当たると微妙にキラキラと輝く工夫がある。家具もハウス・アム・ホルン専用につくられ、世界的にも早い時期の提案を見ても常に新たな提案をし続けている。

ハウス・アム・ホルンは世界で初めてといわれる多くの提案があふれていることに注目した。

世界遺産に選ばれたには理由があった。

グロピウスの新しい提案を受け入れる精神は評価される。グロピウスの「失敗はあるかもしれないが後の人が解決してくれるであろう」という考えは現在の日本に重

要だ。また部下の提案を受け入れる人心操縦術も、部下の能力を最大限引き出すという考え方に学ぶべき点がある。



参考文献

1. Michael Siebenbrodt, DAS BAUHAUS KOMMT AUS WEIMAR ARCHITEKTUR AM BAUHAUS IN WEIMAR
2. Magdalena Droste, Bauhaus, Taschen
3. Michael Siebenbrodt, MISAWA HOME CLUB 50 周年特別号 バウハウスと住宅
4. NICHE 04 ドイツ探訪 バウハウスとその時代
5. 利光 功, バウハウス—歴史と理念, 美術出版社
6. Michael Siebenbrodt, ヴァイマル古典財団 定期刊行書籍 2009
7. 一般社団法人日本バウハウス協会理事, 2020 年建築学会大会論文「バウハウスの考察」